本学における和服教育の歴史と解明

History and explication of education of Kimono making skills in this university

阿部 栄子[1]，杉平 彩[1]，加藤 花苗[2]，松下 千原[2]
Eiko Abe[1], Aya Sugihira[1], Kanae Kato[2], and Chiharu Matushita[2]

[1]大妻女子大学家政学部，[2]大妻女子大学大学院人間文化研究科

キーワード：和服教育，裁縫，歴史
Key words：Education of Kimono, Sewing, History

１．研究目的

戦後以降の生活習慣の変化に伴い，和服製作や和服着装の習慣も減少した．本学の学生を見てもその傾向は明らかである．例えば，本学の大学教育の学びにおいても，何とかそれらの技能を獲得しているのが現状である．本学の学祖大妻コタカ先生が後世に残された伝統的に構築された技術を根底にして，時代の変化に則した形として和服製作技術を教授している．

このような意味で考えると，本学の和服教育はコタカ先生の残された和服製作技術教育を土台としており，製作技術の随所に目を見張るものがある．例えば，着物の形や帯，袋物への工夫は知るところである．本学の 110 周年を機に，コタカ先生が衣服教育への熱意と情熱を向けられた指導書・教科書を整理し，和服製作技術の工夫，試行錯誤を解明したいと考えた．本研究は，これらを明確な形として，後世に伝えることを目的とした．

２．研究実施内容

和服製作は，それを構成する多様な技術の組み合わせによって成立している．この技術・手法は，その人の熟練された経験の蓄積によるものが多い．本学の創設者はその第一人者であり，講演の記録や書籍からも実証されている．しかし，これらはいずれも山積されたままのものが多い．コタカ先生の著書を中心に，和服裁縫の中から先生が試行錯誤された縫製技法や裁縫技術を取り上げ，その手法を考察する．また，そこに至った経緯についても解明する．たとえば，先生の著書として，「新しい仕立て方の着物」が挙げられる．着物全般にわたり，特徴的な技法を考察した．

本学のような家政系の大学では，独自の和服の仕立て方が存在するが，何れも出来上がった形として残されているだけで，その考案に至った経緯や縫製技法は明らかにされていない．長い歴史の中で完成された形の衣服ではあるが，そこに至る技法は様々である．本学の学祖である大妻コタカ先生は，和服製作技術の指導者として第一人者であることから，熟練された技術が随所に存在する．この技術を客観的に明らかにして，日本の伝統的な和装文化を伝承させていくことは学術的にも意味があると考えた．

和服の縫製技術，特に縫製における熟練者の「勘」で記述されている技法を客観的に解明し，後世に伝える．また，本学独特の和服製作技法を明らかにした．

和服の縫製技術の歴史的な特徴を解明することは，本学の教育研究に役立てると共に今後の家庭科教育，女子教育，被服構成学分野に貢献できる土台をつくろうとしている．

和服教育に関する大妻コタカ先生の著書（手芸

品，おさいくもの，洋裁，和裁など），同時代に執筆された他の著者による裁縫書・教授書を対象に，その記述内容について調査・検討した．その結果，他の著者による裁縫書・教授書は，概ね，教育者育成という教育的立場からの著書であると見ることができる．一方，大妻コタカ先生による著書は教育者育成に加えて，更に「良き家庭人になるための教科書である」という要素を多く有しているとまとめることができた．そのため，コタカ先生の裁縫に関する各著書では，衣服づくりのための布遣いに多くの試行錯誤の独特な技法を確認することが出来た．本年度は，特に和服製作の分野（きもの）に注目し，特徴的なきものの製作技法の解明に苦慮した．本年度のまとめとして，実際に布地を用いた試作品に取りかかることが出来た．また，これは他の種類の和服製作にも応用可能であることが実証できた．図 1 には，並幅で長さ 11m74cm の反物を用いて，袷長着を製作した際の完成寸法と形を示した．本図を見ると，標準の袖たけ寸法に比して，やや短めの袖丈ではあるが，これは反物の総丈が長くあればその分，袖丈を長くすることが可能であることを示している．

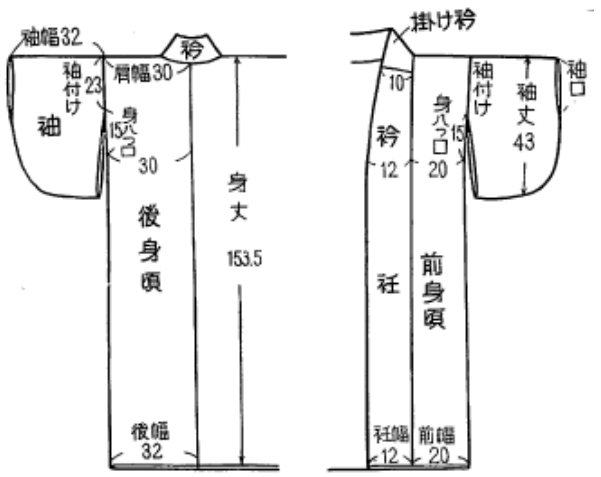

図 1. 裁目なしの方法による袷長着の完成時における長着各部の寸法と形態
（表地用尺；並幅 11m74cm）

3．まとめと今後の課題

近年の和服製作技術は，手縫い裁縫の減少と同様，教育の現場においても何とかそれらの技術・技能を獲得しているのが現状である．しかし，伝統的に構築された和服製作技術を根底に，時代に即した形として，その製作技術は将来に向けて，着実に享受される必要がある．和服製作は，一般に並幅の反物 1 反を用いて 1 枚の着物を完成させる．長さ約 12m の長大な布を裁断することは，必須条件となっている．もし，布を裁断せずに 1 反の長い布のまま，長着を完成させることが可能であれば，初心者の裁断ミスへの対応や次世代にむけての再利用の面からも十分に有効である．本研究では，表地の裁断は一切せずに長着を製作する技術の解明を行った．

試作の結果，裁断せずに製作された着物の外観・着装姿ともに裁断された長着との明らかな差は認められなかった．以上のことから，裁断せずに長着を製作することにより，着用後は別の着物や洋服に仕立て直すことができる有用な縫製技術であり，注目すべき技術であるといえる．

4．この助成による発表論文等

学会発表

日本家政学会第 71 回大会（四国大学）

謝辞

本研究は，大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（K3009）を受けたものである．ここに心より，感謝申し上げます．